

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03214

研究課題名(和文) 死者霊の祭祀・儀礼における伝承の内面化についての民俗学的研究

研究課題名(英文) A Folklore Study on the Internalization of Tradition in the Rites and Rituals of the Dead Spirit

研究代表者

徳丸 亜木 (Tokumaru, Aki)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90241752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代の日本本州ならびに九州、南西諸島、そして韓国において、死者霊の祭祀にまつわる伝承や観念がいかに継承され、再構築され、また創造されているかについて、従来より研究代表者が蓄積した資料と民俗学的フィールドワークにより得られた録音・映像資料を含む調査資料に基づき、伝承の内面化の過程を考察した。本研究では、伝承を支える人々を伝承主体として把握し、伝承を動的なものとして、その継承・再構築・創造に関わる動態を分析的に記述することを試みた。その上で、内面化の概念を再検討するとともに、内面化された伝承の伝承主体による表現として顕在化の概念を提示し、さらなる検討を加えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、現代社会において、死者霊の祭祀にまつわる伝承や観念がいかに継承され、再構築され、また創造されているかについて、録音・録画を用いた民俗学的フィールドワークにより実態調査を行い、また、関連する史資料を含めてデジタル資料化することで、今後の民俗学研究にも生かし得るデータベースの構築を進めた。また、人々が継承・保持・創造する伝承の内面化の過程を考察することで、伝承を過去のものとして静態的に捉えるのではなく、人々の生活の中に生きる動態として把握するための学術的検討を行った。また、現代社会に生きる人々にとって、伝承的世界を儀礼や言語行為として顕在化する今日の意味についても考察を進めた。

研究成果の概要(英文)：This research has accumulated research representatives from the past about how the traditions and ideas associated with the rites of the dead are passed down, reconstructed, and created in modern Japan Honshu, Kyushu, the Nansei Islands, and South Korea. The process of internalization of tradition was considered based on the survey materials including the recorded materials and the audio/video materials obtained by folklore fieldwork. In this research, we tried to grasp the people who support the tradition as the main subjects of the tradition, to make the tradition dynamic, and to analytically describe the dynamics of succession, reconstruction and creation. After that, the concept of internalization was reexamined, and the concept of manifestation was presented as an external expression of internalized tradition, and further study was added.

研究分野：民俗学

キーワード：伝承 伝承主体 内面化 顕在化 死者霊 語り 儀礼 時間・歴史認識

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 23 年度から平成 26 年度にかけて科研による補助（基盤研究（C））を受けた「伝承主体における伝承の主体化・内面化についての民俗学的研究」の継続的・発展的研究である。論者は、多様な生態的・社会的・歴史的環境条件の中での伝承行為の主体たる集団や、そこに重層的に帰属しつつ過去から現在を生きる人そのものを伝承主体として把握する。伝承主体概念は、福田アジオの伝承母体概念<sup>i</sup>の批判的検討の中で、高桑守史によって提案された<sup>ii</sup>。内面化は、基本的には社会化やアイデンティティの確立の過程において行動様式や規範、外部的評価の自己との統合過程として捉えられる。内面化に関わる民俗学研究は、民俗を維持する個人による意味づけとしてそれを捉える岩本通弥の議論を嚆矢とする<sup>iii</sup>。また、八木康幸<sup>iv</sup>、宮前耕史<sup>v</sup>、森谷理紗<sup>vi</sup>などの研究では文化の客体化<sup>vii</sup>からの分析が行われているが、これらは社会化過程における外在化・客体化・内在化のモデルに関わる。本研究では仮に「外在化・客体化を経た民俗が伝承主体の生活の中に再定位され、意味づけられ、一定の規範性を獲得する過程」として内面化を考える。申請者はこの概念に基づき、先の科研における成果論文、「民俗と内面化についての基礎的考察一」において中国浙江省における火葬受容と葬墓制の変化を内面化の視点から論じ<sup>viii</sup>、また「現代の祭礼・行事にみる民俗文化の内面化と儀礼の分節化 山口県下の祭礼行事を事例として」においては、山口県防府市の農村において藩政期から行われている稲の収穫儀礼である大歳講を事例として、そこにおける儀礼的な「笑い」が、いかに地域の祭礼行事の文脈から分節化され、防府市やメディアを通じて観光資源化され、さらにそれが今一度、祭祀集団に内面化される過程を論じた<sup>ix</sup>。今日の民俗学研究や社会学、人類学、宗教学など関連領域においては、生活史研究やエスノメソドロロジー、ナラティブアプローチなど、個人に接近した研究が学界の大きな潮流を成すが、伝承主体論に着目した本研究は、それら研究と関連しつつ、死者霊という過去に存在した主体について現代を生きる人々が保持する発話や儀礼を通じて、伝承の実態調査と帰納的分析からの内面化概念の検討を行う。

## 2. 研究の目的

民俗学が研究対象とする伝承とは、固定化した静的なものではなく、現代社会に生きる人々がその内面で保持し、生活の様々な側面で言葉や行為としてお互いに伝えあい、さらには次世代に継承されて行くものであると論者は考える。伝承は、それを保持し、伝えて行く人々 伝承主体の生活と密着しており、常に動態としてある。本研究では伝承を動的なものとして把握し、その継承・再構築・創造に関わる動態を分析的に記述する。

本研究課題は、現代の日本本州ならびに九州、南西諸島、そして韓国において、死者霊の祭祀にまつわる伝承や観念が如何に継承され、再構築され、また創造されているかについて、今日まで研究代表者が民俗学的フィールドワークにより収集した資料の整理・分析を進めると同時に、新たな実態調査を行い、録音・映像撮影機材を用いたその稠密な記録の作成を行う。それを踏まえて、伝承の内面化の過程を考察し、伝承が現代の地域社会とそこに生きる人々に果たす有意性や問題点を検討し、現代の地域社会ならびに民俗学・人類学・社会学研究に資する事を目的とする。民俗学が研究対象とする伝承とは、固定化した静的なものではなく、現代社会に生きる人々がその内面で保持し、生活の様々な側面で言葉や行為としてお互いに伝えあい、さらには次世代に継承されて行くものであると研究代表者は考える。伝承は、それを保持し、伝えて行く人々 伝承主体の生活と密着しており、常に動態としてある。本研究では伝承を動的なものとして把握し、その継承・再構築・創造に関わる動態を分析的に記述することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本科研では、研究計画段階においては、. 洗骨改葬習俗がかつて行われており近代化の過程において火葬を受容した南西諸島の事例、. 樹木葬や散骨、森や山への納骨などの遺体処理・死者の祭祀儀礼を行っている本土側の事例、. 国際的比較研究の視点から火葬の受容は行われぬまま現在でも複葬と改葬が行われている韓国全羅南道の事例、. 地域の

歴史伝説に関わる伝承上の死者霊の祭祀事例を研究の対象として設定した。また本研究では、伝承主体が、葬送墓制や、祖先祭祀に関わる伝承を継承する過程において、いかにそれを内面化するかにも特に着目することとした。従来の研究においても、ある固定化した事象としての伝承が、その継承の過程でいかに変容するか、あるいは伝承の活用が地域社会に資する意味については多くの議論が成されて来た。しかし、伝承を継承、保持する伝承主体において、伝承がいかに内面化され主体的に意味づけられて行くかについては十分な議論が成されていない。伝承主体を取り巻くコンテクストを、死者の靈魂祭祀を取り巻く共時的社会関係（親族関係など）や地理的・生態的環境からのみ考察するのではなく、伝承主体が背負う歴史的環境や宗教的環境など伝承主体を取り巻く外部的要因が如何に伝承の内面化と主体的な意味づけに影響を与えるかも研究視点に含めた。

#### 4. 研究成果

本科研に関わる民俗調査や資料収集と分析、および発表した成果は主に以下のとおりである。

##### 1、死者霊祭祀の伝承を示す民俗神と内面についての研究成果

- A、地域の歴史的環境と関わる死者霊祭祀の伝承を地域の人々が現在も保持している山口県下関市宇賀本郷大河内集落中地区において三月末に行われるモリマツリの現況調査を複数回実施・記録し、論者が約三〇年前に調査した資料と対比することにより、この期間の伝承や儀礼の変化について分析を加えた。また、同市川棚集落の動物霊を祭祀する伝承を有する楠の森についても現況調査を実施し前回の科研より継続して構築しているデータベースに加えた。
- B、同じく歴史的環境と関わる死者霊祭祀の伝承を保持する山口県下関市湯玉集落において、死者霊祭祀の伝承が地域の人々の生活史との関わりの中でいかに内面化され、物語として再構築されているかについて論考を行った（徳丸亜木「伝承の動態についての小論 山口県A集落の屋敷神・「森神」にまつわる伝承を事例として」『やまぐち地域社会研究』14 2017年3月として刊行）。
- C、熊本県坂本村においては、地域の開拓始祖伝承と関わる森神・屋敷神の現況調査を実施し約30年前の自身の調査データをデジタル化したものとともにデータベースに加えた。
- D、山形県庄内地方の死者霊祭祀の聖地であるモリノヤマについては、モリノヤマに歯骨を収める儀礼について白狐山光星寺、および集落住民に対する聞き書きデータとモリノヤマの画像データを整理・分析し、データベースに加えた。
- E、屋敷神における死者霊祭祀の伝承について、茨城県の農村におけるウジガミにまつわる伝承を旧来からの調査資料を含めて整理・分析し、開拓始祖や先祖祭祀、屋敷地に対する観念との関わりから考察を行った（徳丸亜木「屋敷神と家・屋敷地 北関東A集落のウジガミ祭祀を事例として」『歴史人類』第47号 2019年3月として刊行）。

##### 2、南西諸島・韓国における死者霊祭祀の儀礼・伝承における内面化についての研究成果

- A、韓国全羅南道青山島における葬送儀礼と死者霊祭祀の伝承については研究代表者が過去10年間で調査を行った調査資料の内、写真フィルムやアナログビデオテープ、録音テープなどアナログデータを、科研費による購入機材を用いてデジタルデータ化し、データベースに含めた。
- B、鹿児島県屋久島、ならびに奄美市沖永良部島における葬送儀礼と死者霊祭祀の伝承についても、研究代表者が過去10年間で調査を行った調査資料の内、写真フィルムやアナログビデオテープ、録音テープなどアナログデータを、科研費による購入機材を用いてデジタルデータ化し、データベースに含めた。また、屋久島を開拓し農耕を

広めたとされる文化英雄を祀るとされる神社において行われる聖地祭祀の儀礼について記録を作成し、データベースに含めた。

### 3、伝承主体の語りからみる内面化についての研究成果

- A、韓国巨文島で生まれ、そこで生活経験を有する女性が同島で経験した死者霊に関わる霊的体験を、いかに内面化し物語りとして再構築して表現しているかについて発表を行い、そこに示される時間認識や歴史認識、世界観について検討を加えた。(「変革の記憶と伝承としての継承」2019年11月23日 歴史人類学会第四四回記念大会シンポジウム「継承と変革 歴史学と人類学の視点から」および、「Narrative Interpretation in Folklore Studies: Japanese Emigrants to Geomun-do (Port Hamilton), Korea, and Their Psychic World」として2020年5月29日に The International Academic Forum (IAFOR) The Asian Conference on Cultural Studies, 2020で発表)

### 4、内面化に関わる歴史的・宗教的環境要因についての研究成果

- A、本科研の研究対象地域の一つである、山口県における宗教的環境を幕藩体制下から通時的に理解する基礎的作業として、地域の死者霊祭祀に深く関わって来た各宗寺院の展開について、史資料をデータベース化し、それを統計的に分析することにより、各宗派の分布状況、ならびに特徴を明らかにした(徳丸亜木「藩政期防長二国における寺院展開 『防長寺社由来』の記述から」『歴史人類』第46号 2018年3月として刊行)

### 5、「内面化」概念の検討と「顕在化」概念の提示

- A、現代に継承される民俗信仰を対象として、それを支える人々が、外的な環境条件の変化とその影響とを生活の中でみずからのものとしていかに内面化し、また儀礼や発話などを通して顕在化しているかを検討した。現代的状況における民俗を考える場合、その観光資源化や文化資源化などとの関連から考察することも重要であり、前回の科研では、その点を主要な研究課題とした。同時に、それを支える人々に即して、民俗を維持し、支え、受け継いで行くことの意味を考えることに重要性を認め、特に死者霊の祭祀に関わり、歴史的位相の中で外部社会に隠されて来た民俗信仰を対象として、内面化の概念を、「客体化を経た民俗が伝承主体、すなわち多様な生態的・社会的・政治的・歴史的環境条件の中で、様々な社会・集団に重層的に帰属しつつ、過去から現代を生きる伝承行為の主体の生活の中に再定位され、意味づけられ、一定の規範性を獲得する過程」と規定した。また、顕在化について、「生活世界において伝承主体の内面に保持・継承される信仰的世界の外的世界への表出」として規定した。作業仮説として、伝承主体を取り巻く地理的・生態的・歴史的・社会的・政治的・文化的環境条件などとの相互作用のもと、言語、儀礼、文字文化、絵画や造形物、音や音曲、香や味、身体的所作、社会的結合の様態などとして表出されるものであり、外的世界との相互作用に基づく民俗信仰の顕在化は、伝承主体の内面的信仰世界の客体化と、その再内面化という循環的關係を形成するものと仮定した。この観点を基礎的な理解として三名の登壇者に、それぞれが長年研究を継続されてきた民俗信仰を事象として具体的な議論を行っていただいた。第一登壇者の中園成生氏(生月島の館博物館学芸員)には、今日まで維持された「かくれキリシタン信仰」にまつわる民俗信仰を事例として、現代の時代状況の中で、かくれたものであること自体がいかに世界遺産認定などの文脈に載せられ、内面化・顕在化されているのか、また、「かくれキリシタン信仰」において專業宗教者が不在であることの影響や、オラシヨの継承のありかたについて検討していただいた。第二登壇者の吉留徹氏(土井ヶ浜人類学ミュージウム副館長)には、島嶼など空間的に外部社会との距離を保っていた地域社会の歴史の中で、受容され在地化、内面化された民俗信仰が、本土の交通網整備などによりいかに変化し、かつ人々自身が保持する民俗信仰に対する意識を変えつつあるかについて、山口県下関市角島の浄土真宗信仰を事例として検討していただ

いた。第三登壇者の森田清美氏(志學館大学教員)には、藩政期まで浄土真宗が禁制とされていた鹿児島県下における「かくれ念仏」を事例として、歴史的、社会的、政治的状况の中で禁圧され、かくれた民俗信仰が、それを維持した人々の生活の中でいかに在地化・内面化され、今日実践される儀礼として顕在化しているのかを検討していただいた。コメンテーターとしては、文字文化を含めた歴史民俗学の研究者である渡部圭一氏(琵琶湖博物館学芸員)と、民俗信仰研究への理論的検討を深めておられる真野俊和氏(NPO法人頸城野郷土資料室理事)をお迎えし、概念や事象研究に関わる討論を行った。なお、本シンポジウムは、日本民俗学会会誌『日本民俗学』において、特集として掲載された(「かくれ、あらかず 民俗信仰における内面化と顕在化 特集にあたって」『日本民俗学』302 2020年5月)。「かくれ、あらかず 民俗信仰における内面化と顕在化」2019年7月9日 日本民俗学会第七一回年次大会プレシンポジウムをコーディネーターとして企画・実施、また2019年10月26日 第十屆城市社会国际论坛会议 華東師範大学(上海) 国際学会でも「現代の祭礼行事における内面化と顕在化」と題して、研究発表を行い内面化と顕在化の概念を検討した)。

---

<引用・参考文献>

- i 福田アジオ『日本村落の民俗的構造』弘文堂 1982年。
- ii 高桑守史『日本漁民社会論考 民俗学的研究』未来社 1994年。  
同「民俗調査と体碑—伝承の一側面」関一敏編『現代民俗学の視点2 民俗の言葉』朝倉書店 1998年
- iii 岩本通弥「現代民俗学への方法論的転回」千葉徳爾編『日本民俗風土論』弘文堂 1980年。  
同「総論 方法としての記憶 民俗学におけるその位相と可能性」『現代民俗誌の地平』3 朝倉書店 2003年。
- iv 八木康幸「町おこしと民俗学 民俗再帰的状况とフォークロリズム」『民俗の歴史的世界 御影史学研究会創立二五周年記念論集』1994年。
- v 宮前耕史「民俗に関する言説の内面化 答志島・答志の寝宿慣行をめぐる「民俗再帰的状况」と言説としての「寝宿制度」」『日本文化研究』16 2005年。
- vi 森谷理紗「文化の生成と伝承 日本における「ロシア民謡」のケーススタディ」『口承文芸研究』29 2006年。
- vii 太田好信「文化の客体化—観光をととした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57-4 1993年。
- viii 徳丸亞木「民俗と内面化についての基礎的考察 中国浙江省A鎮・B村における火葬受容を事例として」『歴史人類』41 2013年。
- ix 徳丸亞木「現代の祭礼・行事にみる民俗文化の内面化と儀礼の分節化 山口県下の祭礼行事を事例として」『歴史人類』44 2016年。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 徳丸亜木	4. 巻 47
2. 論文標題 屋敷神と家・屋敷地-北関東A集落のウジガミ祭祀を事例として-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史人類	6. 最初と最後の頁 3,27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳丸亜木	4. 巻 46
2. 論文標題 藩政期防長二国における寺院展開 『防長寺社由来』の記述から 資料編	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史人類	6. 最初と最後の頁 1~32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 徳丸亜木	4. 巻 14
2. 論文標題 伝承の動態についての小論 A集落の屋敷神・「森神」に纏わる死霊祭祀の伝承を事例として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 やまぐち地域社会研究	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 徳丸亜木	4. 巻 302
2. 論文標題 「かくれあらず 民俗信仰における内面化と顕在化 特集にあたって」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本民俗学』	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 徳丸亜木
2. 発表標題 かくれ、あらわす 民俗信仰における内面化と顕在化
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年次大会プレシンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徳丸亜木
2. 発表標題 現代の祭礼行事における内面化と顕在化
3. 学会等名 第十屆城市社会国際論談会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徳丸亜木
2. 発表標題 変革の記憶と伝承としての継承
3. 学会等名 歴史人類学会第四四回記念大会シンポジウム 継承と変革 歴史学と人類学の視点から
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Aki Tokumaru
2. 発表標題 Narrative Interpretation in Folklore Studies: Japanese Emigrants to Geomun-do (Port Hamilton), Korea, and Their Psychic World
3. 学会等名 The International Academic Forum (IAFOR) The Asian Conference on Cultural Studies , 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----